



Title	札幌バンドと英国の非国教徒との比較可能性について
Author(s)	コマシン, ステファニー
Citation	基督教學, 50, 37-40
Issue Date	2015-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62360
Type	journal article
File Information	02 komashin.pdf



札幌バンドと英国の非国教徒との比較可能性について

ステファニー・コマシン

イギリスと日本はともに政治的な混迷の時代に新しいキリスト教の運動が起きた。十六〜十七世紀の会衆派教会、クエーカー、レベラーズ等の非国教徒は、イギリス政府と政治的意見における対立があつたことで有名である。非国教徒がイギリスの国教会に関する法律からの独立を主張したのは当然であろう。それにも関わらず、非国教徒は信仰の自由の権利以外の法律には、あまり抵抗することはなかった。当時の英国国教会の定義によれば、十九世紀日本の札幌バンドは、そのような政治的反抗者ではなかった。札幌バンドの何人かのメンバーが公務員にすらなった。しかしながら、信教の自由に関する決断を明治政府に委ねていたわけでもなかった。

新渡戸や内村の研究者の一部は気づいていないかもしれないが、札幌バンドはあきらかに英国非国教徒の思想の影響を受けたことがみてとれる。会衆派教会員のウィリアム・スミス・クラーク自身は非国教徒ではないが、初代の会衆派教会はイギリス非国教徒の一派であつた。クラークの会衆派的教義とモラルはアメリカに移住した非国教徒から影響を受けている。クラークの札幌農学校で行つたキリスト教活動を大島正健は以下のように述べている。「彼が使つた方法はかなり独創的な手法だつた。ミーティングは主の祈りで始まり、次に聖書を読んだ。(中略)他の全ては即興的であり計画されていない形式だつた。(中略)彼が歌うところは一度も見ることがない。彼が歌えないか、クエーカーと同じく、歌唱を忌み嫌つてゐたのだつた」。

意図的であつたかどうかは確かではないが、クラークはクエーカーのスタイルを生徒達に紹介した。新渡戸はこう述べている「叙任された牧師がいなかったため各人が説教したい時に説教した。信条もなく(中略)音楽もなく、歌う事もなく、牧師もいないのでバプテスマの水もなく、

正餐式もない。(中略) 私はこのような状態でキリスト教徒としての新たな人生を歩み始めた。それだからだろうかアメリカの『見事』と言われる教会にはがっかりしていた。(中略) 素朴さや個として繋がることのできる宗教を望んだが、見つけることはなかった」。

「イエスを信ずる者の誓約」は、クラークだけではなく、札幌農学校の他の二人のアメリカ人教授、そしてクラークの帰国数ヶ月前に着任したウィリアム・ペン・ブルックスも署名した。有名なクエーカーのウィリアム・ペンにちなんだ名前から彼自身がクエーカーだったのかは不明だが、クエーカーの一族に育てられたことが推測できる。札幌農学校の教授たちが札幌バンドに影響を与えたことは当然だろう。

それ以上にトマス・カーライルの著作によって新渡戸と内村も非国教徒の思想に影響されていた。カーライルはスコットランドの国教会から一七三三年に独立した中産階級の分裂派非国教徒として育てられた。カーライルの祖父はそもそも初期の国教反対派の一人であった。カーライルの生きている間に、そのグループは分裂

し中産階級側は分裂派の反中産階級側から破門された。カーライルは晩年にキリスト教の信仰を失ったことは一般に知られている。それにも関わらず、以後の人生でもプロテスタントや非国教徒についてはよい評価を述べていた。カーライル自身がレベラーズのリーダーであるジョン・リルバーンなどの初期非国教徒の書物を読んでいた。カーライルは様々なクエーカーのグループと愛憎混在した関係を持っていた。カーライルは彼らを厳しく非難したこともあるが、時にクエーカーの友人や創始者のフォックスに敬服したこともあった。手紙の中で「フレンド」というクエーカーに人気がある言葉を使い、非国教徒とは友好的な関係にあった。

新渡戸と内村はカーライルの著作に強く影響を受けた。新渡戸はカーライルの『衣装哲学』を「四〇回以上」読み、この本は彼の「人生の保護者(patron for life)」となった。そして彼はしばしばこの本について言及し、また、自分の著作の中でカーライルを推薦した。新渡戸はカーライルの著作でフォックスのことを初めて知った。新渡戸はもっと多くの日本人に著名なクエーカー教徒を知っ

でもらうため、『ジョージ・フォックス伝』と『ウィリアム・ペン傳』を日本語に訳した。

内村はカーライルの本を「私の第二の聖書」と呼んだ。内村のあだ名は「日本のカーライル」、「小さなカーライル」、「第二のカーライル」だった。彼は「このあだ名が好きだ」と言っている。

新渡戸と内村はカーライルの書物を読んで「独立(independence)」について学んだ。新渡戸は「あらゆる種類の見せかけの行為に対して反対の声を上げ、また、偽善者ぶった市民にきつぱりと『自らの良心に従って行動しろ』と声を上げたのはカーライルだった」と述べている。内村の信仰の証とされる「不敬事件」という人生の重大事に際して、それはカーライルによると彼は言っている。カーライルの著作について、内村は「この本を読んではなかったら、私の人生は全く違った」と述べている。内村はこの事件の決断の背景を次のように説明している「その時私はカーライルとクロムウェルに大きくとらわれた思いで、良心に基づきこの命令に従うことができなかった」。

宮部は日本政府で働いていたが、新渡戸への私信で世俗的な教育にも政府から多少なりとも独立を望むことを述べている。「私は教育機関は全面的に政府の手の中にはないことを望んでいる」。

クラークは宣教師ではなく、聖職者でもないので、札幌バンドは最初は自立していた。ブルックスがクラークのもとでの改宗者は誰一人宗派に属さないと書いた。改宗者はメソジスト派のメリマン・ハリスから洗礼を受けたが、彼は一週間しか彼らとともに滞在しなかったため、クラークほどの影響がなかったと考えられる。日本におけるキリスト教の改宗の歴史の中で、札幌バンドは高い自立性を持っていた。

自主と自給自足という最初の頃の経験が「独立」の価値を高めた。彼らは自分たちで決める自由、また、日本人の生来の感覚に訴えて活動を行うようになった。一八八一年に内田静がクラークに私信を送った。彼は「異なった教会政治においては、多種多様に異なった儀式や教会規則があり、異国の地でうまく適合したものもありましょう。しかし、私たちが我が国の人々に適さないの

は、かえって軋蔑（ママ）を生じさせ、福音の普及を妨げることになります。そこで聖書にない儀式で、だれもが聖書に反すると思うものは、排除するつもりです」と述べた。イギリスの非国教徒の表現をはっきりと反映する内田が述べた言葉は、個人の好みの問題ではなく、明白に「聖書に反する」ことの排除について述べている。

私信の中で、宮部は新渡戸に以下のように書いた。「大島は札幌の十一人の改宗者に洗礼を施した。その後、聖職位を与えられてない平信徒がそんなことをするのは不適當だと言っているスミスさんは教会に来なくなった。これは以前から予想していたことだった。称賛に値する大島の大胆な行為は、教派関係者たちのあいだに、意見の対立を生じさせるかもしれない」。新渡戸が「独立」に関する意見を持っていた証拠は宮部への私信の中にある。「キリストは組織を作らなかった。（中略）私自身は、厳守やしゃくし定規に規則を当てはめる宗教的な組織を好まない。太古、原始的な作法に戻りたい。（中略）どうして独自の日本の歴史を尊重し、もっと『独立』することができないのだろうか」。異なる道ではあるが、札

幌バンドと非国教徒は各々の過程を経て「独立」という価値観を深めたと考えられる。